海神

夢屋プラネットワークス
“游人”
宮本　誠一

敏雄は、操舵を片手で操りながら、節くれ立った指先に力を入れ、握り手で巻き上げるようにスロットルを絞り込み速度が張詰って噴き出してくると、船の舳先にぶつかり二手に割れていく波の音と女たちのざれごとをさっきから交互に重なり合い耳にしている、そんな気がしていた。夢の中にいるようだった。

「敏雄さん、あんたもいよいよ父ちゃんげなね」

「ほんなこてね、いつんまに嫁さんもろてきたつ？」

採れたばかりのアサリは、塩と磯の匂いが籠り、船底に山と積まれた女たちが五枡ごとに詰込んだ青いナイロン製の網の中で声を密めて縮こまっている。鳴くでなく観念するでもなく、ただ潮の引きに抜かれまいと、急いで泥を被ったところが貝掘り女たちのこしゃぐガン爪で陸に揚げられ鎮まってしまい、生臭い風のようなものをその殻の暗い淵から放すだけだ。

律子を連れて来た時、母の美佐江は彼をなじった。

どこの馬の骨ともわからぬ雌犬をこの家に置いておくわけにはいかぬ。雌犬は、やがて雄犬を何匹も引連れこの家へやってくる。田畑を荒らし、網を食い千切り家を荒らし、土地も財産も何もかも咽み尽してしまう。お前にもまだ分別があると思っていたが、ここまで落ちていようとは思ってもみなかった。我、年老いたと言えども、菊岡の仲買としての誇りは捨てていないつもりだ。先祖から受け継いだ土地と家、今のふしだらなお前にやるわけにはいかぬ。

父親の由介はその時、黙って母親の後ろに立っていた。隣町の同業の二男坊で養子だった。それに三年前、荷揚げの仕事の最中腰の骨を悪くしてからは、特に力を落としていた。

しかし、そんなあられな言葉を投付けられながらもうろたえる両親を前にして、敏雄は充分満足していた。律子を使って自分の力を誇示することが目的だったからだ。彼女は既に子を孕んでいた。敏雄からすれば誰の種ともわからぬ子が、女の鼓動に包まれた下腹の中で四月目を生きていた。そしてそのことが、今思えば敏雄のしくじりの第一の始まりだったと言っていい。律子の膨らみは美佐江に素早く見抜かれ、その怒りをある一線で食止めさせてしまうことになったからだ。母親は、腹の子がてっきり我が子の蒔いたものだと判断したのだ。

夏の熱い盛り、高校を途中で退学し仕事もせずぶらぶらと遊び惚けていた敏雄を庭先まで引摺りだし、竹竿がへし曲がらんばかりにぶち叩き、仲買の仕事に連れ出していた厳しい面影もそこにはなかった。

自分は、近頃臆病になっている。

敏雄は、波の音を耳にし目覚めるように操舵を傾けると、今ある現実を胸のどこかで認めている反面、強く恐れる自分を恥じた。

潮の飛沫が舷に跳んできた。

有明海の潮の満ちは速い。湧水のような潮流がどこからともなく血のように沸き出てき、眼前に太陽と月と地球との陰影をつくり出す細かな中にも大胆な営みを見て取るようだ。ちょろちょろちょろちょろとした流れは次第に凄まじさを増し、墨色に地表を舐め尽くす勢いで覆ってくる。微かに沈む西日を受けて潮の動きは蛇行するようであり、波の穿った先端は鱗に蔽われた幾つもの痩身を白金の中にぬらぬらと蠢かせ輝かすようだ。うねったかと思うと地を這い、船艇を掌で弄ぶように押し流してくる。敏雄は底板一枚の足下の動きに呼吸を合わせスロットルを徐々に上げ下げしながら回転数を調整し、自分たちを運ぶ器が潮の満ちに乗じたことを確かめた。船は

上下に僅かに揺れながら横に行くに従い湾曲し細く伸び切った堤防を目指して進む。敏雄は、その堤防と舳先を糸で結ぶように目線で岸までの距離を測りスクリューで波の深さを聴き分け、馴れた手つきで背の張った船腹が砂を浴びる一歩手前に停止するようエンジンを切った。

岸に着くとさっそくトラックへの荷揚げの仕事が待っていた。船から堤防の坂を登り切るところまでは耕運機でやり、後は、その荷台からトラックへと次々と運び込む。一緒に船に乗っていたアルバイトで来ている従弟の英治が敏雄を手伝った。

美佐江が、帳面に女たちから何枡採ったのか聞き取りながらそれらを小まめに記している。どれだけ働いたかは口約束で決められる。誰も疑う者はいないし、嘘を言う者もいない。仮についたからと言ってそれがどうなるというのか。仲買がその帳尻は合わせるしかない。菊岡に来るものは腕の良い玄人ばかりで、少ない者でも一斗から二斗、多い者で四斗は採ってくる。そんな貝掘り女を手放しては、仲買は死ぬしかないのだ。

「めっきり貝も少のうなって、手ばっかし動かしたところでちっとも出てこんばい」

「あんたたちばっかりが頼りなんやけん、がんばってくれんなら」

美佐江が、駄菓子屋の千代に声を掛けている。千代は、貝掘りには店をわざわざ閉めてやってきていた。

「店の方も、スーパーできてから客来んごつなったし、貝掘りでがまださにゃ、私ら食っていけんもんね」

「ほんなこつ、ほんなこつ」どこからともなく相槌がでるが、その主はダバを脱ぐとさっそく帰り支度を始めている。シュミーズも下着も露にして着替えにかかる。

「尻んとこまで濡れて、こっじゃ良か男も寄りつかんごつなる」

「あんたその年で、よう言うよ。今日船ん上から小便しよったつはどこの誰ね」

さすがに仕事を終えた安堵感か、潮になぶられた髪もそのままに、女たちはそんな冗談ともつかぬたわ事をポンポン飛ばす。どこからともなく哄笑が起こった。

トラックへの荷揚げが済むと、敏雄は運転席に乗り込み、隣には英治が座った。このまま荒尾から博多の市場まで直行するのだ。仲買で買った二倍から三倍の値で売り渡すことになる。

「エイジ、今日おまえ運転してみるか」敏雄が、煙草を取り出しながら言う。

「取ってすぐじゃけんね」含羞んだような英治の返事がかえってくる。

「かまわんかまわん。さっさやって、馴れとった方がよか」

英治の不慣れな運転でトラックが出発すると、美佐江は、孝造の事務所に向かった。海岸沿いに少し歩き、もと海水浴場があった脱衣場あたりから土手を下って道路に通じるその間に孝造は、プレハブの瀟洒な造りの一階建ての事務所を設けていた。

今日の採れ高と、女たちの一人一人の数を事務所の手伝いをしている二女の尚子が計算機に打込んでいく。

「なんも、そぎゃんきちっとせんだっちゃ、ちゃんとこん帳面に書いてあるとおりなんやけどね」美佐江がそう言っても、「ばか言え、数が問題じゃなか。市場での売り値とこっちで採った量とばいつも目やっとかんと痛い思いすっとたい。なんも売るっとこは博多ばかっじゃなかつやけん。分けて売ったっちゃよかつ。柳川辺りででん、今時はよう売るる」

孝造は、尚子の隣で画面を食い入るような目付きで睨んでいる。

既に日は、有明海を挾んでその丘陵の影を見せる雲仙岳と多良岳の中間に陥没する諫早の向こうへ隠れ暮れてしまっていた。

全身汗だらけの筈なのだが、夏でも仕事着として長袖の上着を身につけている美佐江にとってはその事も気にならず、手と足の汚れを外の洗い場で落とすと三和土のつづく家の中へと入って行った。親の代から風呂と台所以外は建増しすることも改造することもなく、襖を取り外し夏は吹き抜けにしてある広い家には美佐江の他今は誰もいない。由介は漁協の会合で稚貝の養殖の件で出回っていたし、敏雄たちは、三か月前から既にこの家を離れ女と一緒に隣街にアパートを借りて住んでいた。家の周囲は江戸時代に干拓された地帯にあるためどこの庭の組成も砂浜と似たり寄ったりのようなもので海抜が零かそれ以下にあり、貝殻が多く混ざっていた。美佐江が子供のときなどは掘ればすぐに塩水が滲み出てき、磯蟹がうろうろ土間の中にまで入って来ては飼い猫の恰好の遊び相手になっていた。

家の座敷の奥には様々な記憶が生々しく残っている。美佐江にはそれらが折りに付け昨日のことのように思い出されてくることがある。

敏雄が、高校で何が気に食わなかったのか暴れに暴れ他の学生の処分をするのなら自分から止めてやると校長室に申出退学したまではよかったが、職を探すでもなくかといって仲買の手伝いもせずぶらぶらしていたときのことだ。

二日ほど家を空け友人の家を飲み歩き帰ってきたことがあった。日の沈みかけた頂度今と同じくらいの時刻だった。気の強かった筈の美佐江は居間の奥で一人蹲り泣いていた。「どうしたのか」敏雄が訊くと美佐江は眉間を吊り上げ「どうしたもこうしたもない。なぜ、お前は高校を止めたのだ」と反対に突っ返した。相手は「またか」と思い、後は口を閉ざし黙っていた。すると美佐江は躰を震わせながら思い余ったように仔細を話し始めたのだ。敏雄の相変わらずの生活に不安を持っていた美佐江は、じっとしてもいられず妹の夫に当る伯父の家に相談に行ったのだ。伯父は、隣の県の私立の大学を卒業し市の役場に勤め、今では庶務課の部長の地位に着いていた。背がずんぐりとしていて、年の割に髪の薄い男だったが、美佐江が最近新築したというその伯父の家へ行くと、玄関口で有無を言わさず追い返されてしまったと言う。

「今どき、高校を途中で止めた者を雇ってくれるところなどどこにもない。まして、こんな小さな村であろう筈がないではないか。仕事を見つけろなど土台無理な話だ」そして美佐江が黙っていると伯父は終いには、「お前がしっかりしていないから、こんなことになるのだ」とまで言われたという。敏雄は、かつての荒々しさも消え、黙ってそれらを聞いていた。

敏雄たちが博多で荷を下ろし戻ってきたのは、夜の十一時を少し回っていた。英治を家までトラックで送った後、敏雄は孝造の事務所にそれを置き自分の車に乗換え、アパートに帰ってきた。アパートは、かつて炭鉱町として賑わった市街から少し外れた湿気を吸込んだような暗い県道と僅かに交錯する細い道沿いにあった。

律子が、待っていた。彼女は、敏雄のよく行き付けていたスナックで『エリナ』という名で働いていた。大づくりの女でちょっと町にはいそうにない顔つきをしていた。律子という名もどうやら疑わしかったが、彼女がそう呼べというから敏雄もなんの気なしに外に言うときはそれを通していたのだ。

部屋の中には風呂から上がってすぐらしく化粧水の匂いがこもっていた。

「おそかったね。ご飯食べてきたつやろ」

「飯はよか。エイジとうどん屋行ってきたけん」敏雄は、手にしていた果物籠を律子に渡した。

「お前、酸っぱいもん食いたいいよったやろが」

「そっばってん……、こぎゃんたべきるやろか」

律子は、レモンやら蜜柑の詰め込まれたその籠を重そうに両手で持つと腹の膨らみの上に載せるようにし、踞んでいいのやらそのまま立ってさっそくビールでも出そうか考え込んでいる様子だった。

「そうそう、風呂入らんといかんやったね。わたしつかったばかしやけん、よう沸いとるよ」

律子は、卓袱台に手を掛けると、よいしょと畳の上に膝を曲げ踝をそっと寝かせる恰好で横座りになった。

「私だめなんよね。肌弱いし、なんか風通しが良すぎるとすーすする感じでいかんとよ」

まだ彼女と知り合って間もない頃、律子とホテルへ行った帰り、よく車の中でそんなことを敏雄は囁かれた。片足を軽く差し出し、くるくるとストッキングを両手で巻き上げながら別の他人の男がいることさえ気にしていないふうに色の落ち掛けた琥珀のマニキュアの残る爪先を反らせ、反対に空洞へのめり込ませていく仕草は、その頃の敏雄には退屈させない何かを持っていたし、前戯とも後戯ともつかぬ敏雄の粗けずった行為を律子は彼女なりに受け止めてもくれていた。

「そういえば、ママね、昨日久し振りに会ったら私にこぼしとったよ。大事なお客さん盗まれた言うて……。でも変ね。ふつうやったら店の子とられたって喧噪ふりまくのに。やっぱ、田舎ばいねここ」

律子はその頃つづけ様に、そんな柄にもないことをあけすけと敏雄につぶた。　　「私の代わりはね、もう見つけとるんやって。韓国から来る言よったけど。私より美人やけん、心配することなかて逆に励まされた」

その店の主人はもと土建屋で、額には縦に深い傷のある色黒で凄味の利く男だった。やはり、敏雄と同じ工業高校を出たあと建築会社に勤めた経験を持っていた。ママはよくその当時の話を、客待ちでいるとき律子の前でしてくれていたらしい。

「なんでも、出張がつづいとったげなたい。九州の中が主だったそうばってん、それでん何日も家ば空けとらすことが多かったって」

敏雄は、喫茶店やその頃よく使っていた梨山の奥にある溜め池のほとりに建ったばかりの外国

の名前を付けたホテルでよくその話を聞かされた。日頃あまり喋りたそうでないことも、律子はそんな時にはよく言葉になって出てくるようだった。

「女ん人ば、ようつくりよらしたげなけん。夜ね、ひさしぶりで家におらしたら、他の女の人の名前ば寝言で言よらしたつ。よっぽど気持ちんよかったつやろうって、ママ言よらした」

その話なら敏雄は主人から直接聞いたことがあった。一時その店に入りびたっていたとき一度だけマージャンに誘われたことがあったのだ。二階で女の自涜しているビデオを流しながら、いつものそこの常連の客と卓を囲み、二万ほど落としたそのときだった。

自分がむっくり起き上がったとき、女房はやけに機嫌がよかったと言う。布団を片付けるときも食事のときも普段と変わらず、むしろ動きそのものには日頃には見られない軽快なところさえ見受けられたそうだ。子供を学校へ送り出してから、いつもならもっと露骨に疲れた表情を見せる筈なのにその日だけは何かそそくさと他人行儀なところまで感じられたという。頂度、仕事は休暇日に当たっていた。

「夕べは随分、楽しそうやったね」

昼飯時、それまで何やらおかしいと思っていた相手に突然つっぱぬかれたようにそう言われ、主人は一瞬冷やりとなった。それでも夢のことまでは皆目見当がつかず、黙って知らぬ振りをしていると、「りえって誰よ！」堪えかねていたように相手は絶叫し泣き出したと言う。狂気のようなものさえそこには感じ取れたという。

「俺も悪いことしたばい」主人は高校が後輩の敏雄には、ついつい気を許してしまうのか、そんな話を人ごとのように語って聞かせた。エロビデオはいつの間にか切れていた。

次の日、事務所に行くと寺田の家から絵美が来ていた。

尚子が今日は急用ができたため、その代わりに来たという。

「尚子、今日デートやけん、わたしが顔見にきた」

「お前に計算機いじくれるんか？」敏雄も中学まで同級生だった寺田の長女の絵美になると口が一層荒くなる。

「あら、たーだ留守番しとけばよかつじゃなかっとね」

「そっじゃエミ、ただの置物よりひどかぞ。お前も船で沖行って貝ば掘ってこい」　その日の干潮は、一時過ぎだった。そろそろ船を出す準備をしておかなければならない。　敏雄は海岸へ行く前に、一応昨日の卸値を孝造に説明した。

「むこうには佐賀からもぼちぼち大粒のが入ってきよるけん、そろそろ柳川あたりに切り換えた方がよかつじゃなかか」敏雄は、由介が腰を悪くしてから仲買の仕事をとにもかくにもやり始め三年が過ぎ、今では少しは市場の動きが分かるようになっていた。

「まだまだ心配せんでよか。そっちん方は俺が今日電話入れて確かめとくけん。お前は事故のなかごつ船とトラックば運転しよけばそれでよかつ」

だが、長い間寺田を支えてきた孝造から見ると、そんな敏雄もまだ貝漁の本当の恐ろしさを知らない菊岡の若い甥に過ぎない。

「そうそう、妙な女にも騙されんごつせんとね」絵美がふざけたように敏雄に近付き、しげしげと髭も剃っていない不精な顔を見つめた。

「なんばほざきよるか。お前もはよ婿さんさがさにゃ、売れのこっぞ」敏雄が、軽くその頭を小突く。

「建一が言よったが、昨日は英治に運転させたげなね。あいつは、荷揚げの手伝いだけきよるとやけん、あんまり無理さすんなよ」孝造は嗄れた声で敏雄に注意した。

「行きだけちょっとしてもらったつたい。寺田んよか二男坊やけん、今の中うんと鍛えとかに

ゃね」孝造は、ほとほと困ったように「そっで、ちっとくたびれとるごたるけん、今日は休んどけ言うた」敏雄を恨めしげに見る。

「オッちゃん、甘かね。まあエイジは俺んごつ高校途中で止めることもないやろけん、どっかん会社勤めして仲買することもなかろばってん」敏雄も所在なげに言う。「そんにケンイチ兄ちゃんもおるこつやしね」

やがて、風通しを良くするため開けておいたサッシの扉口から、敏雄の声を聞きつけたように美佐江が息巻き入ってきた。
「敏雄、なんしよっとかい。こぎゃんところで油売って、はよ船ば出さにゃ。とうちゃんが、今日はお前と行く言うてさっきから待っとらすぞ。急がんと潮ん干上がってしまう」
敏雄は美佐江には歯が立たない。返す言葉もなく絵美の方をちらりと見、観念したように苦い顔をするとそのまま事務所を後にした。
「遅かったな、何しよった？」由介が、ダバを着て待っていた。
「孝造んところで、もたつきよった」美佐江が敏雄の代わりとばかりに甲高い声で返事する。
「父ちゃん、大丈夫とな。腰ん具合は？」敏雄も、さっそくダバを穿きながら由介の罅の入ったような浅黒い顔を見る。
「こんくらいんこつで、どぎゃんなろ」笑いもせず相手は答える。
敏雄は船の纜を杭から解き索輪を船首の中へ投げ上げ、由介と美佐江の三人船べりを外から抱えるようにして海へと押出した。船底と砂とが擦れ鋭く軋む音がしたが、それも潮に漬かるとすぐに収まった。女たちがぞろぞろやって来ていた。
「さあ、乗ってくれんね」美佐江が愛嬌を振り撒き女たちを促した。
敏雄は、由介とゆっくり船の向きを変えていった。ずるっずるっと少しづつ深みへと入っていき、膝の辺りに来るとそれを止めた。後は女たちが全員乗ってしまってからまた押出すのだ。漁船とは言っても、船べりが低く広い大形のボートのような形をしたこの船は女たちにも多少力があれば腕で軽く躰を押上げ跨ぐことができる。仲買で使うためのものを注文しわざわざ造ってもらったのだ。海苔の養殖などに使う船とも違いこれには、波の心配の方もさほど考慮に入れて造られてはいなかった。
敏雄は由介と、女たちが乗っても揺れないよう船べりをしっかり握りながら、時折時計を見ていた。今こうしている間にも干潮は刻一刻進んで来ている筈だった。潮の引きに旨く乗りながら今度は沖へと向かうのだ。沖の表面が顔を見せるのはほんの二、三時間足らずしかない。
女たちが乗り終ったのを見届けると由介と敏雄は潮が股に付くまで押しやってからほとんど同時に両側の舷からバランスを崩さないよう船の中へ乗り込んだ。敏雄は船尾に付くとさっそくエンジンを掛ける。スロットルを回し、スクリューの回転数を上げ、多少そちらに傾いだようだが、敏雄は気にせず舵をとった。
「敏雄さん、今日は東風が吹きよるけん、ひと雨くるんじゃなかと？」顔馴染みの千代が訊いた。
「沖ん出て雷きたらたまったもんじゃなかけんね」
空は確かに雲行きが怪しくなりどす黒い雲がちらほら見え始めていた。夕立ちがやってくるのかも知れなかった。女たちは雷には臆病だ。いや、臆病というより敏感だった。敏雄ら男たちより素早くそのことを感じ取り声に出さずとも密かに怯えたり、いつの間にか忍び寄る足音を聴くように息を潜めたりする。貝掘り女とはいえ、そのときは普通の女に戻り、豪放さはなくなっている。

舳先は、正面から吹く風を切っては上空へ推し上げるようにしながら進んでいった。風は生き物のように二手に分かれ霧のように湧き上がり、各々の顔をなぶりながらまた船尾を過ぎると離れた躯を結び合わせていく。時々海に浮かぶ浮游物をとらえたのか、船底に釘の引っ掻き傷のような音を立て細い木切れのような物がぶつかりその存在を訴えていく。

敏雄は目的地を目指し、スロットルを上げた。

女たちは、徐々に沖に近付くにつれ黙り込み、貝をどれだけ採れるかその集中を計るため思案しているようだ。敏雄にもその緊張感はひしひしと伝わってくる。僅か三時間足らずが女たちにとってその日の勝負なのだ。どこの干潟を狙いどの辺りにガン爪の最初の一刀を食らわせるか、それは全て女たちの執念と勘のようなものにかかっている。経験も確かに必要だ。だが、敏雄は明日の糊口のため常連に誘われ初めてやって来た女がいつも来ている女と変わらぬぐらい貝を採ったのを見て知っていた。貝堀りには、その本人の能力より何か執念めいたものが作用するときがある。五枡なくともその女の差し出す網袋は、他の者と比べ同じくらいに重く、塩水に何度も漬け泥を流し疑う敏雄を最後には仕事の忙しさに任せ納得させ船に積めこませてしまう、そんなことも幾度かあるのだ。

船が船体を安定させるに足る最大限の潮と干潟の擦り合う場所に着いた。

潮もまだ残っているのも気にせず、女たちは乗り込んできたときとはうって変わり一言も発することなく、それぞれに意志を躰中から溢れさせ、船べりを跨ぎ潮の引きに追い付き追い越す勢いでどす黒く影を持つ方向へと散らばって行った。

女たちは腰を屈め手を使って自分たちと同じく物言わぬ貝をこしゃぎ採り、網の中へ入れていく。手に付けたゴムの手袋は一日だけで穴だらけになり貝の破片で切り裂かれてしまう。手首に赤い血を流し塩水につけながら、それでも辛抱し採りつづけている者もいる。うかうかしていると良い貝の寄せ場が他の女の手で奪われてしまうからだ。女たちは、言葉をなくし無言で腕を前後に動かしている。敏雄と由介は、そんな採れた貝袋を抱えながら艙へ載せるのだ。塩水が滴りながらダバ靴を伝っては濡らす。

作業は、黙々とつづけられ、陽光は少しずつ西へ傾いていく。

網袋も重ばり、船腹を僅かに湿った潮水とその下の潟に押し付ける程になってくると、いつものように風が湧いてきた。風は向きを変え潮の満ちを知らせるのだ。

干潟の様子は、少しづつ変貌し柔らかさを増し、水分の多さを女たちの掌に直に感じ取らせてくる。女たちは、尚急ぐ。潮の満ちる前に自分たちの力を尽くしアサリの寝床を襲い採れるだけ採り、掴めるだけ掴んでおこうと女たちは、足を踏ん張り腕に力を入れ、首を屈め股の間から錦の模様の付いた貝を一個二個と指先で数えながら宝石を扱うように網に満たしていく。

やがて潮は満ちてきた。流れが手元に届いてくると足先まで漬かるのは思いの他速い。潮は待ってくれることも休むことも、そして澱むこともなくきらきらとその中に、季節により繰返される光を称えながら無情にもやってくる。もっと長い間、この干潟が顔を出しつづけてくれればと女たちは無言の中に思う。眼前の泥を被ったような干潟が見る見るうちに消え失せ、跡形もなくなっていく。女たちは、諦め切れない表情で今入れかけていた網を手にし、船に乗り込んで来る。敏雄も由介もかなり遠くまで稼ぎに行っている女たちを呼び寄せにかかる。潮は満ち、荷で重くなった船を、少しずつ今度は、どんよりと曇った空に向かって浮かせにかかる。

女たちは元いたように船に乗り込み、そぞれに堪り兼ねたことを呟き、ごちった。
船に帰り岸まで戻れる充分な深さになるまで自分たちの躰を指針に、重りの秤に掛けるように、地上から浮き上がり海面と一緒に船体もろともその接触する体積が増加するのを待っている。
船は出発する。
エンジンの音を響かせて、今度は岸を目指し女たちの採った海神のわずかな思召しを載せ、ざれごとと一緒に誰の待つでもない岸へと帰っていく。雨は思い出したようにその時強く降出し海面を走りきり、覆い尽くす。
誰かが叫ぶ。
「今日もこれでなんとか、飯の支度ができるごたる」
海神は、ここぞとばかしに雨を降らし、黒く覆った空に雷光を浴びせる。女たちは顫える間もなく船から下り立ち、岸の堤防の中へ吸い寄せられるように消えていく。敏雄は、顔に雫を幾つも付けた由介と一緒に、それらを見守る。

敏雄と律子が二人で生活し始めたとき、律子の腹の子は六か月目に入っていた。小太りの管理人が、訝しそうにその辺りに視線を落としうろんげな目付きを送っていたのを思い出す。

律子はよく、自分から話を余りしたくないとき敏雄が何か仕掛けてくるのを待つ側に立つ自分を苛立たしさ半分で冷視するときがあった。躰の節々が持っていき場のないほど重苦しく感じられ、少女の時分のそこはかなさが寂しさと一緒に記憶に浮かんではまた消えた。

一人、また一人と友達が減っていく炭住地で、家の前に立ち影踏みしているその足場のなさと不思議とそれは旨く交錯する。どこか激しいいたぶりを覚えながらも子供の頃の律子はそんなとき自分で自分の躰を精一杯受け止めていくしかなかった。

敏雄は敏雄で、菊岡の今の家は、彼自身の持っている幼い記憶と混ざり合わず、どこか着間違えた他人の服のように肌からするりと遊離してしまうものだった。かりに最初の記憶が美佐江の背中におぶさり乳臭い中で市電に乗せられどこかへ出掛けたものだとしても、それは美佐江の躰を通し、自ずとその家と結びついてはいる。ひまし油のような匂いとともに由介に初めて海に連れ出され、波の上に浮輪のようなものを持たされ浮かんでいたのもそうだ。もしかするとあれは家の釜風呂の中で腕に掴まり抱きかかえられていただけなのかも知れない。しかし、それらの幾つかの記憶の断片が、今どうしても怪しくなり自分の躰の奥底で拒絶でもするように溶け込まなくなってきていたのだ。美佐江が、由介が、その仲買の躰を通して知らせていた筈の菊岡の家が今敏雄の内部で音もなく変化し崩れかかっているような気がしているのだった。少し離れているだけで家というものは、こうも寄せ付けぬものに成り果ててしまうものなのか。敏雄はそんな思いに駆られていた。

それから三か月がたち、律子は、まもなく臨月に入ろうとしていた。夏を過ぎたとはいえ陽射しはまだ強く、敏雄は、冷えた麦茶を喉を鳴らし飲みながら一息つくと、窓側に立った。風が入ってきたが、そう強くはなかった。

「あんまりよか風じゃなかな。台風が来るらしかぞ」

律子は黙っていた。

その日律子は、敏雄と菊岡の家に行ってきたのだった。

「上がらんね」
二人が土間に立つと美佐江が正面の居間から暖簾を邪魔そうに手で払い除け、顔を出した。奥から聞き馴れた絵美や尚子たちの声が聞こえてきた。美佐江は、敏雄の肩口にいる律子の顔をちらりと見ただけで、すぐにまた引き込んだ。絵美たちの話し声が止むと英治が出てきた。
「トシ兄ちゃん、今姉ちゃんたちとそっちん噂ばしよったとこだったばい」
話が旨く出来過ぎているところを見ると、どうやらそれは絵美の差し金らしかった。敏雄は、律子を後ろに従え、框に足を掛けた。
由介と孝造、それに健一は気を利かしたのかそこにはいなかった。
しばらくそこにいる者でたわいない世間話をした後、「そっで、律子さんのことばってん」美佐江が、要件は早く片付けておこうという心積もりか、少しせかせるように口を切った。
「そろそろやろ」美佐江は、律子の下腹に視線をやった。呼吸をするたびに開ききりそれでも動かず自分の位置だけはじっとして知っている、そんな見る者に無表情な膨らみがそこにはあった。「こっち来らせたらどげんね」そのとき律子は、当然かもしれないが、敏雄と二人アパートにいるときとは別人のようにおとなしかった。それでも、旨く尚子や英治に話を合わせているふうでもあり、ただ、おそらく尚子と同じ年格好になる筈なのだが、どこか場慣れした感が彼女にはどうしてもして、それが出来てて知らぬまに自分を幼く見せているようでもあった。その事が絵美の性格には癇に触るものらしく、自然と三人の中に割って入りながらも、いつの間にか寺田の者らの肩を持つことになった。
「オバちゃん、でもやっぱり二人だけの方がよかつじゃなかと？」
絵美が言った。それには形だけの挨拶程度の思い入れの他、一応の解決に臨む態度が見て取れるには取れたが、やはり一等親しいなじみの者の弁護でしかないことがどことなくその語調から伝わってきた。敏雄は大きく胡座をかき、太腿にあった手をもどかしげに動かしながらもぞもぞ脇を掻き、決まり切った会話の繰り返しに煙草を吸った。
そんな敏雄に絵美がすかさず訊いてきた。
「あんた、どう思っととね」
敏雄は、ゆっくりと灰皿に煙草の灰を落としながら、
「俺は、どっちでんいいと思っとる」事もなげに言った。
「ほんなこて、こん子は呆るるね」美佐江は、恨めしげに敏雄を見た。
首の折れたような扇風機がしなだれ、回転しながら生温い風を送っていた。
英治と尚子は、雲行きが怪しくなってきたのを機に寺田の家に一度帰ることにした。
「母ちゃんによろしゅうね」美佐江が引き際に声を掛けると、「お母ちゃんほんとは来たかったつばってん、あんまりどやどや押し掛けても仕様がなかけん、よう来らっさんやったつよ」尚子が、最後に捨て台詞のように、自分たちがその代わりに無理に足を運んできたのだと聞こえげに言った。英治はその後ろでニタニタ笑っていた。
「姉ちゃん、嘘ばっかしつきよる。トシ兄ちゃんの嫁さんば見てやろう言うて、喜んで来たくせして」
「なんば言うとね、聞こゆっどが！」
二人の話し声は、庭先からも敏雄たちの耳に、充分とどいた。
結局、話はつかず終いで、その日敏雄と律子は、早々と菊岡の家を後にし炭住地のそばのアパートに帰ったのだった。

「なんのことはなか。ていよく時間つぶしただけのことたい。エミの口車にのったつが運の尽きじゃった。お前にも悪かったな」
敏雄はごまかしたという気持ちはなかったが、心の底で渓流が音立て崩れそれが土砂を運ぶ前に塞き止められようとする、そんな取り繕う自分の蒼い顔が浮かび、どこかでそんな自分を嘲笑っていた。
そのときだった。
「お前、泣きよっとじゃなかつか」
敏雄が、しばらくの沈黙の後、堪え切れず訊いたのは。律子は踞んでいた。背中を少しこちらに向け敏雄から顔が見えないぐらいに座っていた。敏雄がまた窓の外に目をむけると「うんにゃ」とか細い声が聞こえてきた。
それから五日して、律子は菊岡の家に入った。
敏雄は相変わらず帰りは十一時を過ぎていたし、海岸沿いではあるが少しでも病院に行くのに都合もよく、交通に便利な菊岡のほうが万一のとき良いだろうと律子の方から言い出したのだった。
「子供生むのにどっちでん同じやろ」
「そんなことなか。こっちとあっちじゃ全然違う」
敏雄の方が反対に律子に宥められる形となり、それでも内心ほっとしたのか、敏雄には相手の真意などもうどうでもよくなった。
アパートには、敏雄一人が残ることになった。
九月になると、さらに海は凪ぐことを知らなかった。
大型で雨も風も強く降らす台風が南西の方角からやって来ていた。風のざわめきと言わず風そのもののような音が波の打ち寄せる海岸端からは聴こえてきた。
「敏雄さん、今度のえらいでかかみたいばい」
女の一人が、引きの船の中で心配そうに訊いた。この一帯も明日あたりからは暴風圏内に入るであろうことが予想された。
「貝掘りん方は大丈夫やろか」その不安をよそに、「台風がくれば、どぎゃんもこぎゃんもならん」敏雄は、あっさりそう答えた。
当然夏が終わってからは英治は来なくなり、今はまた由介と二人で船に乗っていた。由介は頂度船首の方にいて、女たちや採れた貝を間に挾んで敏雄と同じような恰好で前方を見ていた。敏雄は、今日船を出す前に由介が聞かせてくれた話をまた思い出していた。その話も今と同じようにかなり大きな台風がやって来、それが過ぎ去った次の日の昼前の話だった。敏雄はまだ生まれていず美佐江の腹の中にいた。
「なんさま、あれは凄かったぞ。瓦は吹き飛ばすわ、道路は水に漬かるわ。いややっぱそれより風が強かったね。あぎゃんまともに直撃したのは初めてやった」
由介は話の内容とは対称的に余り興奮するでもなく、いつもと同じ静かな口ぶりだった。まるで人にそれを聞かせ馴れた物腰にさえ思えた。敏雄はなぜかそんな父親の前で息が詰まりそうに思い、ただ突っ立っているわけにもいかず隣で煙草を吸った。

「どうも、そん日は朝から海が気になってな、そわそわすっとよ。もう四日、シーズン真最中ていうとに沖にも出られんで家でくだくだ酒ばっかりのみくさっとったけんやろね」
由介は似合わぬカタカナを使い、それが敏雄には可笑しかった。
「海に出ておったまがったぞ。そん日の干潮が来てすぐやった。台風は過ぎとってでんまだ風も強う吹きよったし、雨もまだ止んどらんやった。そぎゃん物好きなもんは他に誰もおらんで、父ちゃん一人そこにはおったたい。父ちゃんは、ここん浜に来て海ん様子ば見よったつ。やっぱりそん日も船ば出されんやったけんむしゃくしゃしとったつやろね。そっでん初めは、あれば見たときはほんなこつ雲仙岳がぼんやり見えよる思とったつぞ。雨も止みはしよったし、視界でん少しは良うなりよった。ばってん違うとたい。どぎゃん見たって違うとたい」
「どぎゃん違うとな」
敏雄も急いた。
どうしてか理由はわからないが敏雄もそれに似たものが今眼前にくることを知り苛立っている様子だった。蒼白い穏微なもやもやしたものが渦を巻き錯乱しているようで、それを払い除けたい気持ちで足下に煙草を乱暴に投げ捨てた。
「貝たい」
由介のその声を聞いたとき敏雄は予想が外れたのか当たったのかそのどちらともつかぬ思いで、躰の奥に一つ、確かに顫えるものを認めた。
「貝がそう沖でなかとこに、父ちゃんの背ん高さより高う山のごつ、頂度雲仙だけと重なるようにしてどっさり積まれてあったつぞ。そら父ちゃんも自分の目ば疑ったくさ。そっでん何十年も貝ばかり見て育ってきた自分の目たい。そうそう嘘ばつくもんじゃなか。父ちゃん、焦ってな。それからすぐ家に戻って母ちゃん引っ張り出すにも母ちゃん、腹ん中お前の入っとたけんどげんもできんし、孝造げ行っても信じてくれんけん。せからしなってトラック乗って、貝掘りん女ば拾て行ったたい。あたりかまわず声かけて乗れ乗れ言うて。騙された思てとにかく乗れ言うて。干潟飛ばしていったたい。抜かるんで出られんごつなることも何も考えんやった。もうそぎゃんこつはどげんでんよかったもん。菓子やん千代でんそん中ん一人たい。あんこつのあったけん今でん菊岡に義理もってくれとるやつはだいぶおる」
敏雄は半ば信じられない気持ちでありながら、美佐江からそのことは子供のころ聞いた記憶が多少あった。
美佐江もそれからどうしても由介の言うことが気になり大きな腹を抱え海岸まで歩き、その様子を一部始終見てきたという。
貝の山か何か知らないが堆い固まりが由介や女たちの中にどっしりと黒い影を落とし、音のまだひゅるひゅると猛っている余風といっしょに潮の香を運んできた。
動き回る女たちの姿も影となり、その黒い固まりに溶けるように吸い込まれまたそこから離れ、今度はそこに巣くう獣のようにもそれは映ったと言う。台風の夜中の風と潮の流れの影響でいつのまに一所へ吹き寄せられたのか、あんな信じれぬことも長く海のそばに生きていればあるのだと、美佐江はつくづく感心したという。
どこまでが本当の話かはわからなかった。敏雄には、それが由介の菊岡へ果たした自分の数少ない手柄話のようにも思えたし、美佐江とぐるになり敏雄自身生まれる以前のことにあれこれ着

飾りをつけ、一つ絆そうと企んでいるようにも思えた。
　「あの辺たい」由介は、腕だけがそこにあるというような皺だった手を差し出しその辺りを示した。
　船は今、その指差されたところを通ったばかりだった。

「敏雄もしょうもなかね。時化で船だされんごつなるとまたパチンコ屋行ったたい。台風んこようがパチンコ屋だけはよう繁盛しよるごたる。役場ん前にも一つできたげなばってん、役所んもんも、昼休みんときから行きよるげなけん。ほんなこて飽きるる」
美佐江が孝造の事務所から帰ってくると、台所にいた律子に言った。律子の予定日はもうとっくに過ぎていた。一度陣痛が起こり病院へ行ったが、また治まり二日入院しただけで帰って来た。それから四日経っている。
「もうそろそろ生まれんと、かえって危なかけんね」
美佐江は、あまり律子に相手の家のことについては訊こうとはしなかった。今はとにかく子供を無事生んでもらうことだけを考えてもらうよう持っていっていた。祝言も上げていない。相手の父親や母親にも会っていない。その親が相手の女にいるのかさえわからなかった。一度だけ、父ちゃん母ちゃんは、と尋ね掛けたときがあったが律子は笑いながら、ちゃんと連絡はしてあるから心配しなくていい、ときっぱり言った。だが、電話一本掛かってこないのは何とも解せず腑に落ちなかった。
アパートにいるとき美佐江は、敏雄にはもちろん内緒で律子を何度か訪ねたことがあった。最初、あのように強く追い出したためどこか気が引けるところがあるにはあったが、そこは美佐江も菊岡の娘だった。自分で息子の連れてきた女のことはしっかりと確かめてみたいと思ったのだ。
「父ちゃんは父ちゃんで、台風きたとたん、海の様子ばっかり見にいきよるし。またあの夢んごたることのあると思とっとだろか」
律子が、黙って何やら立ち仕事をしているところを見、美佐江は卓袱台に腰を落着けながら「そっがねあんた、敏雄が私ん腹ん中おるとき、海に貝が山んごつ集まったこつのあったとよ。今と同じこぎゃん台風の過ぎてすぐやったけど」
律子は、驚く素振りも一つ見せず、腹を抱え茶の用意をしに入ってきた。
「なんか、あんときと似とるとばってんね……」
美佐江が律子にそのような話を直接するのは珍しい。菊岡へ来てからというもの、美佐江と律子は接近するでなく日々の食事の支度やら用足しやらをそう細かに決めずにできるだけ距離を一定に保ち、気楽な同居人と見紛うように送っていた。一つのことをするにしてもそれを際限もなく探っていけば結局は赤の他人であるだけにすぐに手詰まりになってしまう。お互いそのことを重々知っていて、年は違ってもそのへんは旨く躱していく術を心得ていた。
敏雄が律子を初めて菊岡の家に連れ雌犬と罵られアパートへ引き籠もるきっかけをつくったあの日から、既に半年が過ぎようとしていたのである。
律子は美佐江へに茶を汲みながら、これまでのことをあれこれ思い出すというわけでもなく、しかも悪粗や窶れもさほどない自分の躰が親から譲られたものであることに自分を捨てて逃げたことを咎める気さえ薄らいでいっていた。多少とも情なく喘ぎたい日々がアパートにいるときも菊岡の家に入ってからも当然あり、それでもこちらを選び取り平然と暮らしていられる今を、何か恐ろしい得体の知れぬものに自分がなり、その力を借りやっていると思わないではなかった。
なぜあのとき敏雄にアパートとここでは同じ子供を生むのに全然違うなどムキになり言い張ったのか。目の前の美佐江を見ながら今では少しは分かるような気がした。

「律子さん、あんた…」
美佐江が律子の苦しげな表情に気付いたのはそれからしばらくたってからだった。
律子は呻くような声を上げていた。眉間に引き攣った皺が寄り首筋に青い血管が浮かんだ。躰が小刻みに顫えていくのがわかった。疼くような伸し掛かってくるような体感と同時に顔がみるみる顰まっていった。
美佐子は、タクシーより速いと孝造の事務所に電話した。

一万負け、敏雄がパチンコ屋から出てくると風もかなり弱くなり、日のいどころもどこにあるのか厚い雲に覆われ当然わからなくなっていたが、確かに暮れ沈んでいることは、辺りの薄暗い闇に包まれた様子から判断できた。

パチンコ屋の周辺だけが何か浮かれたけばけばしいライトに照らされ仕事にあぶれた者の巣くう一時凌ぎの余興のような雰囲気を持っていた。

敏雄は帰りを急ぐでなく、車に乗り込むと菊岡へ久しぶりに行ってみようかと思案したがそれも止めた。

海が気になった。

明日、船が出せるか、そのことがどうしても頭に残り、なにか落着かず気むつかしい顔にしていた。海岸へ行き由介のように波の音を聴けばその昴りもおさまるのかも知れなかったが、そうすることも敏雄にはできず律子と知り合った店にでも顔を出してみることにした。

車を店の前の道脇に止め、店の主人の趣味なのか、変わり映えのしない朱色に塗られた扉を開け入っていくと顔馴染みの電気屋の長男と次男が二人早々と出来上がりやってきていた。なんでもアンテナが颱で倒され、その修理にここ三日で六十件近く仕事があったのだという。一件につき五千円貰ったにしてもざっと三十万ほどの儲けになる。

「電気屋にゃ、台風さまさまばい」

兄弟は、さすがに今日は早く切り上げ、上機嫌に飲みに回ったというわけだ。とにかく道楽息子たちで有名で、一軒の雑貨屋から今の店にまでにした父親がつい二年前に死に、ようやく浮きがちだった腰を据え仕事に少しは精を出し始めたという二人だった。近く父親の買っておいたもう一つの土地に弟が店を建て独立するつもりであることを、兄である敏雄より五つ年上になるその長身の男は言った。

ママは兄弟がいる手前、敏雄と律子のことについては何も言わなかった。おそらく村で評判のことでもあるし兄弟もそのことはどこかで耳にしたことはあるに違いなかったが、それを今口に出せば、根堀り葉堀り聞かれることはわかっていたしそれを無碍に拒むのもつまらない。敏雄はそんな気分ではなかったしママもそのことは知っていた。

「マスターは？」

敏雄は水割りを口に含みながら、やることもなくそんなことを訊ねた。

「あん人最近、早朝ソフトボールのチームつくらしたけん。そん習慣で朝は早かばってん、夕方今の時間はぐうぐう寝とらすとよ」

敏雄は主人の傷の入った顔で持ち場であるというショートの位置に入った姿を想像し、可笑しかった。

水割りを三杯飲んで、その店は出た。擦れ違いに女を二人引き連れた乗馬ズボンの鋭い目付きをした男と会った。その男も稼業は瓦屋を営んでいた。台風で来る客層も決まっているようだった。敏雄は、新しく入っていたミユキという名の店の若い子の顔もよく思い出せなかった。

帰り際、ママが律子のことについて一つ二つ訊いたが曖昧に答えておいた。

敏雄は、頂度良い酔い醒ましとばかりにママが制止するのも聞かず車にどっかと乗ると、アクセルを吹かした。

風が熱を持った頬をなぶり、躰を弄ぶように包み込んだ。やがてどこぞの父親になる男の躰だった。風は覆うかと思えば、また逃げた。敏雄はその風を追うかのようにアクセルに力を入れ、たちまち速度計は、九十キロになった。敏雄が幼い頃からよく知った土地だった。やがていくとカーブがあり、そこを越え三叉路からその右を真っ直ぐに行けば海岸に出られる。由介の言ったことを信じているわけではなかった。貝が山のように雲仙と重なるように見えた。戯言だ。皆して俺を担ごうとしている。敏雄はカーブに差し掛かった。最近舗装されたばかりの道だった。炭鉱会社が持っていた元炭住地の土地を市が買取り、潰してつくった道路とそれは間もなく繋がるという話だった。律子の顔が浮かんだがそれもすぐに消えた。三叉路を折れ、敏雄はまた一段とスピードを上げた。一二十キロをメーターは打った。こ煩さい警戒音も気にはならなかった。直線路をこのままただ突っ走るしかないと敏雄は思った。戯言か幻であってもそれを自分の目で見、確かめるしか術を知らなかった。

潮の匂いがしてきた。

車の速度を落とすとタイヤは大きくスリップし、そのまま半回転し危うく堤防にぶち当たりそうになったが、運良く段差に助けられその寸前で停止した。

雨は止んでいた。車から出て堤防を駆け下り砂浜に立つと敏雄は、目を見張った。雲仙岳と多良岳の異様な黒い影の間に聞き覚えのある塊があった。よく見るとそこには女たちが集い声を出しながら網を持ち腰を屈め、忙しく手を動かしているのだった。敏雄は近付くこともできずその場に立ち往していた。

声がした。幻聴のような響きをしていた。女たちのざれごととも律子の苦しみよがいている呻きともそれは取れた。敏雄はそのことを自分の耳に留めるとしばらく茫然とした。

どれだけたっただろう、敏雄はまた切り裂けるような潮の打ち寄せる波の音で自分を取り戻した気になった。何かが可笑しく嘲笑いたいのを必死に堪え、また車に引き返した。由介の言ったことをわざわざ真に受けここまで車を飛ばして来た自分が、やがて二十五になる男とは思えぬほど面映ゆく情なかった。海はよく見れば相変わらずいつもと同じ情景なのだった。波の音がここ数日降りつづいた雨や風や台風のことも忘れさせるように静かに鳴っていた。

美佐江の電話の声で、敏雄の頭が割れるように音がし目が覚めたのは、その次の日の朝早くだった。

女が生まれていた。

夢の中にいるように、敏雄には思えた。

海神

http://p.booklog.jp/book/36312

著者 : 夢屋プラネットワークス“游人たち”
代表　宮本　誠一
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/asobito/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/36312

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/36312

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.